

## 19 【せんじゅ】

祠の先の古社（やしろ）に、【せんじゅ】が棲（す）んでいる。

そう懐爺にきかされて、【せんじゅ】を訪ねたものです。

お土産は千粒の甘納豆で、百個の饅頭だと、他の九百の手が、不満のために手をのぼしてきて、首を絞めるのだそうです。

それでぼくは、【せんじゅ】とは、千手観音（せんじゅかんのん）の千手だと知りました。

「かんのんさまなら、こわくはないのう」

ぼくがつぶやくと、懐爺は首をふりました。

「千手観音の千手は、たくさんの手で、恵まれない者たちを救いたい一心からそうなっているのです。ところが【せんじゅ】は自分の心と関係なく、手が千本になったから、人間を恨んでいるのです」

「わしらのせいなのかのう」

「小川はもともと水が清らかで、みずすましが、いっぱいうかんでいたものです。蛙もみんな小川で卵を産んだ。金ちゃんは小川でおたまじゃくしをみたことがないでしょう。なぜならいまは、みんなが塵や屑や芥（あくた）を小川に捨てる。今や小川は、毒と菌の巣窟（そうくつ）になってしまっているから、卵だって、無事には孵（かえ）らない。孵っても、手足が何本もある蛙となってしまう。長く小川のほとりに棲んでいた【せんじゅ】のお母さんは、難産（なんざん）のすえに【せんじゅ】を産み落としましたが、そのまがまがしさに、お母さんは【せんじゅ】を社に捨てた。【せんじゅ】は社に棲んで、おばけになったのです」

「せつないのう」

ぼくが社につくと、【せんじゅ】は待っていました。

懐爺からきいていたのかもしれない。

【せんじゅ】は、ぼくをみて笑いました。

ぼくがおばけ好きであることも、きいているのかもしれない。

甘納豆をみてもっと笑いました。

千粒あると、わかったのかもしれない。

ぐび

ぐび

ぐぐぐ

ぐび

【せんじゅ】の千本の手が、甘納豆にのびます。

手というよりも、無数の蛇の首にみえました。

それでもちっとも、こわくはない。

【せんじゅ】は十歳にもみえたし、百歳にもみえました。

顔も体もひどく汚かったけれども、目だけはみずすましがういた、水面をおもわせました。

「せつないのう」

ぼくはいいました。

「なんの、なんの」

【せんじゅ】はこたえました。

「せつないのう」

それしかぼくは、言葉が無かったのです。

「拙者（せっしゃ）をみんなはおぼけというが、おぼけではござらん」

【せんじゅ】はそういうけれども、ぼくには信じられない。

「おぼけにしかみえん」

ぼくは正直にいいました。

「拙者はおぼけではなく、人間の標本でござる」

「ひょうほんかい」

ぼくは夏休みの宿題の、蝶（ちょう）の標本をおもいました。

あれは動いていないが、【せんじゅ】は動いている。

千本の手が、かわるがわる、甘納豆にのびてくるのは、何とも不気味で、心がときめく。

ぐび

ぐび

ぐぐび

ぐぐぐぐ

「ほかにいいようもない。人間が人間っぽく暮らさなかったその標本が拙者でござる」

【せんじゅ】は断言したけれども、ぼくはいささか疑問でした。

「かわをきたなくするのは、にんげんっぽいぞい」

あえてぼくは、そういつてみました。

【せんじゅ】は肩を落としました。

「大人が悪いから、こどもでもそういう発想になってしまう。よくおばけはおそろしいというけれども、人間よりもおそろしいものは、この世にはござらん。なぜなら人間は、人間っぽくしない動物ですから」

「むずかしいのう」

ぼくは正直にいいました。

【せんじゅ】は懐爺よりも理屈っぽい。

「きみたちは拙者にならないこと、きみたちは拙者のこどもをつくらないこと。それが肝腎（かんじん）でござる」

【せんじゅ】の目をみていると、【せんじゅ】は正しいのだと実感しました。

正しいのだけれども、おそらくその正しさを、自分たちは理解できないのだとかんじました。

「せつないのう」

「そのとおり。せつないのは人間であって、おばけではござらん」

そういったなり、【せんじゅ】は社に消えてしまいました。

ぼくは、またこようとかがえました。

またこよう。

こんどは千個の、おにぎりをついで。